明石の史跡（１６）神戸女学院と明石

　明治６年（１８７３）、アメリカ伝導会社派遣の、２名の女性宣教師が、花隈に開いた私塾が、明治８年（１８７５）、山本通（神戸市中央区）に新校舎が建築され、関西での女子教育のパイオニアである神戸女学院の成立をみた（兵庫県大百科事典上、９００頁）。

第一次大戦が終了した翌大正８年（１９１９）、特例として専門部が「大学部」と呼称する特例が認められたのを契機に、一層の教育内容の充実・向上を目指し、前年（大正７）に、組織化された同窓会による神戸女学院後援会が、大正９年（１９２０）８月、法人化された。塚本ふじ同窓会長・第一回卒業生の市田ひさの両婦人が理事に就任。大正１０年（１９２１）８月、明石大蔵谷敷地の買収が、学院理事会において決定。交渉の窓口となった後援会は、山林田畑１２，０００余坪の売買契約を結んだ。１１月には隣接地の購入計画が進展。最終的には、大正１２年（１９２３）６月までに確保した敷地面積は、２１，０００坪（購入代金は１３７，０００円）であった。

大蔵谷敷地の所在地は、山電大蔵谷駅の北方約１キロの台地といわれ、「丘の斜面は松の緑に覆われ、頂上から海を望めば淡路島は間近に浮かび、夕映えの美しさはまた無類」と形容されるこの場所。残念ながら筆者には知る由もない（諸賢の教示にまちたい）。　学舎の移転が実現しなかったのは、つぎの二つの疑問による。一つは関東大震災の経験により、新に削平された造成地への校舎建設にたいする疑念。それに今日のように宅地開発が十分でない場所における、女子学生の寄宿・通学の安全性への疑義（神戸女学院百年史総説１６４－９頁）。大蔵谷移転が実現していれば、明石の学校事情にも影響を及ぼしたことであろう。

日本歴史学会会員 茨木 一成